

自己評価表（令和2年度）

教育方針	地域社会と一体となって、校訓「克己」を基に、社会の形成者としての自覚を持たせ、生徒一人一人の能力・適性・進路に応じた指導とその実現に努め、心身ともに健全でたくましく生きる人間の育成を期す。	重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 元気に学校生活に取り組み、生き生きと輝く生徒を育てる。 2 より高い確かな学力を身に付けさせ、自己教育力を育てる。 3 規範意識・自己統制力・共生の心・対人関係能力を育てる。 4 希望進路を実現させるとともに、勤労観・職業観を育てる。 5 たくましい体力を身に付け、心身ともに健康な生徒を育てる。
-------------	--	-------------	--

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況 ※()内は昨年度の数値	次年度の改善方策
学校経営	魅力と活力ある教育活動の推進	生徒が生き生きと活動し、学校生活に充実感を持つことができる学校づくりを目指す。「起業家教育プログラム」を始めとする独自の魅力的な諸活動において積極的に外部人材を活用し、人材育成を目指した魅力ある教育活動を推進する。	B	学校生活に充実感を抱いている生徒は、昨年度と同じ85%であり、コロナ禍の影響が心配される中、ほとんどの生徒が充実感を持って学校生活を送れているようである。感染症対策により「起業家教育プログラム」における外部人材の活用が制限されることもあったが、オンライン型と対面型の授業を組み合わせるなどの工夫によって、魅力ある教育活動を行うことができた。	次年度は県外生の増加が見込まれるが、より一層、生徒一人一人に目を配り、生徒たちが目的を持って学校生活を送ることができるよう、教員間で情報を共有しながら、学年団を中心に適切な支援を行う。また、教育活動の更なる魅力化を図り、地域と協働しながら生徒の主体的な活動となるよう支援する。
	人間としての在り方生き方を考える教育の充実	ホームルーム活動の時間に、年3回は人間としての在り方生き方を考える時間（道徳教育）を設け、学校生活における様々な場面での指導の充実に取り組む。A:3回以上 B:2回 C:1回 E:0回	B	ホームルーム活動の年間指導計画の中に道徳教育を位置付け、各学期に1回実施した。また、全校集会や学校行事等を通して、豊かな心を育てるとともに規範意識の高揚を図った。また、公開授業時に人権に関するホームルーム活動を保護者や地域の方にも参観していただく機会を設けた。参観後には意見交換会を開催し、今後の取組について話し合うことができるように工夫した。	道徳教育の全体計画を踏まえて、全教員が、各教科や特別活動等の諸活動において、生徒の自尊感情を育み、自己有用感を高めることができるよう取り組む。また、継続して、人権に関するホームルーム活動にもっと多くの方に参観いただき、意見交換会を開催することができるように今後とも取り組む。
	開かれた学校づくり	年間15日程度の教育活動公開日を設定するとともに、参加者数の増加を図る。A:14日以上 B:13～11日 C:10～8日 D:7～5日 E:4日以下 生徒たちの学校生活の様子をホームページに毎日掲載するなど、積極的な情報発信に努める。	A	95% (87%)の保護者の方に学校の様子が積極的に発信されていると評価されている。また、公開授業や運動会・文化祭といった教育活動を年間10日以上公開するとともに、学校ホームページを毎日更新するなど、多くの保護者や地域の方々に本校の教育活動を知っていただけるよう、積極的な情報発信に努めた。また、地域みらい留学フェスタ等に参加し、県外の方にも本校のことを少しでも知っていただける機会を設けることができた。	本校の教育活動を、県外の方も含め多くの方に知っていただけるよう、校内外での生徒の活動や発表を積極的に行う。また、ホームページを毎日更新し、タイムリーな情報発信に努める。
	地域との結び付きを大切に した魅力ある教育の推進	地域住民との交流や幼・小・中学校等との交流学習を積極的に行い、豊かな人間性を育む。教科「探究」や起業家教育プログラムを中心に、地域を担う人材の育成に努める。	A	「地域や保護者との連携・協力」の項目について、保護者の95% (84%)、生徒の93% (94%)から高い評価を得ている。生徒がコスモスの苗を育ててお年寄りに配ったり、自治会連絡協議会等で学校の取組を発表したりするなど、積極的に地域と関わるとともに、教科「探究」におけるプロジェクト学習を通して、地域未来の創造への意欲・関心を高めた。	地域や幼・小・中学校と連携した、交流、奉仕、防災等の活動の充実に努める。また、外部講師を積極的に活用し、様々な人との出会いを提供するとともに、普段の授業では学ぶことができない体験活動の一層の充実を図る。
学習指導	家庭学習の充実	生徒が主体的に家庭学習に取り組み、毎日平均して3時間以上の学習時間を確保するよう、各教科における指導法の工夫・改善、ICT機器の効果的な活用に取り組む。A:180分以上 B:179～150分 C:149～120分 D:119～90分 E:89分以下	C	1学期平日が約144分(約163分)、2学期平日が約126分(約141分)、3学期平日が約139分(約108分)で、1・2学期は大幅に減少したが、3学期は少し持ち直した。しかし、目標の3時間には届かなかった。また、28% (27%)の生徒が家庭での学習習慣が身に付いていないと自己分析している。 全教員が遠隔授業の研修を受講するとともに、ICT機器活用の頻度や技術の向上が図られている。	引き続き、各教科で計画的に課題を与えるとともに、その評価・点検を徹底していく。また、家庭での学習につながる授業の展開及び自主的な予習・復習が習慣化するような指導を今後とも継続していきたい。 また、次年度より、生徒一人に1台のタブレットが貸与されるので、効果的なICT機器の活用を目指して、技術・技能の習得ができるよう研修に取り組んでいきたい。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
学習指導	教科指導の充実	生徒のやる気を引き出す指導の充実を図り、85%以上の生徒が「分かる授業」であると実感できるよう、授業評価の充実を図り、工夫・改善に取り組む。A: 85%以上 B: 84~70% C: 69~55% D: 54~40% E: 39%以下	B	生徒の95%(92%)が、保護者の98%(85%)が「分かる授業となるよう先生が工夫・改善をしている」と評価した。また、公開授業で参観していただいた保護者の約97%(約95%)の方からは「授業の工夫や改善に取り組んでいる」との評価を得た。	授業アンケートの「やる気を引き出す授業でしたか」という集計結果と合わせてを分析すると、まだまだ課題は多いようである。各教科においてそれぞれの課題をしっかりと確認・分析し、指導方法や使用教材の研究に努めるなど今後とも改善に取り組む。
		習熟度別学習や個別指導を徹底するなど、一人一人を大切にしたいきめ細かな教科指導の実践に取り組む。	A	生徒の95%(91%)が、保護者の100%(93%)が「一人一人を大切にしたい授業が実施されている」とし、また、生徒の93%(95%)・保護者の100%(89%)が「先生は個別指導も熱心に取り組んでいる」としており、高い評価を維持している。	引き続き、習熟度別講座編成や幅広い選択科目開設などに努め、少人数指導を充実させながら、生徒の能力や進路等にに応じた個別指導の徹底を図る。
	言語活動の充実	教科指導や教科外指導を通じて、生徒が主体的・協働的に学び、思考力や判断力、表現力等を身に付けるよう取り組む。	B	各種行事の実施後に感想をレポートにまとめたり、報告会でその内容を発表したりするなど、言語活動の充実を図ることができている。また、「オダカン」等においてアクティブラーニングの推進に努めており、多くの生徒が主体性や積極性、思考力や表現力等を身に付けることができていると考える。	全ての教員が共通理解の下、地域の方や企業の方との協同的活動も積極的に取り入れながら、様々な教育活動の機会を捉えて、個々の生徒の生きる力の育成につながるよう、言語活動の充実に努める。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	基本的生活習慣を確立させるために家庭との連携を深め、安易な遅刻・欠席を防ぐとともに、校内における教育相談体制の充実に努め、一年間の皆勤率60%以上を目指す。A: 60%以上 B: 59~50% C: 49~40% D: 39~30% E: 29%以下	A	健康で充実した高校生活を送るために必要な、基本となる生活習慣の確立を遅刻・欠席の割合で見た場合、いずれも皆勤率60%以上を達成することができている。また、学校評価アンケートの結果をみても、生徒の自己評価で、「身だしなみや基本的生活習慣をきちんとしている」の項目において、63%がきちんとしていると回答しており、生徒自身が自覚を持って生活を送ることができている。	これからも基本的生活習慣の確立を目指し、その基本となる遅刻・欠席をなくしていく努力を惜しまないようする。学校評価のアンケートで、保護者の回答にある「身だしなみや基本的生活習慣をきちんとしている」の項目がきちんとしているの割合を55%から65%に引き上げるべく、家庭生活の中での生活習慣に目を向けたい。
		学校・家庭での生活全般において、自律的・積極的な生き方を身に付けるため、規範意識の向上に努め、学校や社会のルールやマナーを遵守し、自己管理ができるさわやかな生徒を育てる。	B	学校での人間関係において、多少不安のある生徒が見受けられたものの、集団の中で個が育つ雰囲気が学校全体にあり、救われた生徒も多かったのではないだろうか。規範意識を高めるために、学校や社会のルールを知ることから始まり、実行できる人材の育成に教職員一丸となって取り組む姿勢が見受けられた。	県外からの生徒が増えることに対して、学校全体で今までのような校風を維持していくために、何をしていけばいいのか考える必要がある。生徒会の活動を充実させて、全校生徒が一つになって、小田分校を盛り上げていく機運を醸成する。
	特別活動の充実	部活動の参加率を高め、適切な練習時間や休養日を設定し、生徒一人一人が部活動等に意欲的に取り組み充実感を味わい人間性の向上に努めるとともに、県大会出場35%以上を目指す。A: 35%以上 B: 34~25% C: 24~15% D: 14~5% E: 5%以下	A	特別活動については、部活動を活性化させるために努力してきたが、新型コロナウイルスの影響があり、生徒にとって満足する活動ができなかったのが残念である。 地域活性化プロジェクトや多くのイベントを通して、分校となった学校の姿や課題を多くの方々に知ってもらえた一年ではなかったかと思う。	部活動(体育部門)は、内子高校本校との合同チームでの活動になるが、このことを前向きにとらえてお互いに切磋琢磨していく雰囲気を作り出していく必要がある。よって県大会への出場については、各部で調整していくために、本来出場可能な生徒が出られなくなることも考えられるため、そのケアも大切になってくるので、両校の顧問連携を密に行う。
健康・安全指導の徹底	健康・安全・防災等についての講話や指導、実習等を年間30回以上実施し、生徒自ら安心・安全な生活できる能力や資質を培う。A: 30回以上 B: 29~20回 C: 19~10回 D: 9~1回 E: 0回	B	健康・安全・防災等に関しては、ホームルーム活動、教科、そして学校行事等で、具体的に学習できた。特に訓練や実習という事態を想定したものであるにおいては、より一層の意識改革や向上心を持った取り組みができていた。いざという時の行動力が身に付いたのではないだろうか。	健康・安全・防災等についての講話や指導、実習等を機会を見つけて実施し、生徒が自ら安心・安全な生活できる能力や資質を培っていく指導を行っていく。	
	交通事故0件を目標に安全指導の徹底を図り、交通ルールを遵守しマナーの向上に努めるとともに、自他の命を大切にできる生徒を育成する。A: 0件 B: 1件 C: 2件 D: 3件 E: 4件以上	A	交通事故の報告は、0件であり、交通ルールの遵守と「自他の命を大切にする」という意識は、よく身に付いている。これからも、いつでも交通事故の当事者になる可能性があることを肝に銘じて、自転車やバイクの運転をしてほしい。	県外からの生徒の数が増加するため、不慣れた道路を使用することになる。特に、年度当初の交通安全について、具体的な事例を示して指導していく。	

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
進路指導	キャリア教育の充実	職場見学、インターンシップ、講演会、ガイダンス、学年指導等のキャリア教育を通じて、望ましい勤労観・職業観を育成する。さらに、各種活動において各自の目標と振り返りができるように、キャリアパスポートの充実を図る。また、生徒や保護者に対して、ホームページを活用した情報発信にも努める。	B	職場見学やインターンシップでの外部研修、外部講師を招いての講演会やガイダンス、学校内で実施する学年指導、各学年に応じたキャリア教育を充実することができた。各学年の就職・進学指導を通して、職業観や進路に対する意識を高めることができた。 キャリアパスポートの作成に取り組み、生徒の体験や活動等の振り返りを行うことができた。また、ホームページにより各行事の様子を配信することができた。	生徒の希望や適性に沿い勤労観・職業観が育成されるよう、各種ガイダンスや学年指導などのキャリア教育を充実させてきたが、生徒数減少により実施困難なケースが出てきた。各学年で実施予定であった外部講師を招く行事を、どう計画するかを再考する必要がある。 キャリアパスポートでは、担任の先生の負担が多いように感じることから、学年団の中で割振り等を考えることとする。
	個に応じた指導の充実	「学びの基礎診断」や各種模試、補習の実施により、生徒の学力向上を目指す。また、ガイダンスを通して進路意識の高揚を図るとともに、個々の進路希望に応じた面接及び志望理由書等の指導を行う。大学進学を希望する生徒に対して、個別の教科指導の充実に努め進学就職率100%を目指す。A:100%以上 B:99~90% C:89~80% D:79~70% E:69%以下	B	各先生方の協力により、就職指導(校内就職模試の実施・適性検査の実施・応募書類の作成指導・面接指導等)、進学指導(進学模試の実施・適性検査の実施・小論文指導・志望理由書作成指導・面接指導や受験科目に対する指導等)において、個に応じた指導を行い希望企業や大学へ合格させることができた。 「学びの基礎診断」により、就職希望であった生徒に対しても実力を計ることができ、事前・事後の指導を行うことができた。	進学・就職指導においては、計画的に実施できた。来年度も引き続き日程を調節し計画的に実施したい。しかし、生徒の志望校や受験方法に合った学習指導・面接指導を行う上で、特定の先生方への負担が大きい。受験方法も多様化しているため、各学年での意識付けを早い時期から行い、生徒の特性に合った受験方法の把握や受験に対する意識を高められるよう指導していく。
業務改善	適切な勤務時間	週に1回「ノー残業デー」を設け、教職員の時間外労働の時間削減を図るとともに、業務の効率化への意識を高める。	D	毎週月曜日を「ノー残業デー」に設定し、できるだけ早く退勤するよう呼び掛けた。しかしながら、忙しい時期になると少しずつ退勤時刻が遅くなるなり、そのうちに「ノー残業デー」の意識も薄れていった。	仕事が偏りすぎないよう、校務分掌等に配慮する。「ノー残業デー」については、月曜日の職員朝礼時に周知板を表示したり、学年・課等で互いに声を掛け合ったりするなどして徹底を図る。
	職場環境の整備	年休の積極的な取得を呼び掛けたり、上司に相談しやすい雰囲気を作ったりすることにより、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図る。	B	年休取得については、審査中などに呼び掛けし、取得しやすい雰囲気が生まれている。Web会議専用の部屋を作り、毎回器材をセットする手間を省いたり、業務員室を教職員が休憩できるような片付けたりするなど、職場環境の整備に努めた。	今年度の改善は教職員からの提案により実現した。次年度も引き続き、教職員の疲労や心理的負担の軽減につながる職場環境の改善について、提案しやすい雰囲気づくりに努める。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。